



やきもののある暮らし

美術評論家・日本陶磁協会常任理事 森 孝一氏

卓話者紹介

森さんとは森さんが美術系の出版社の編集者の時から、40年来のお付き合いをさせて頂いております。講談社に在籍中は、小松先生の古筆の集大成を17年間かけて本にされました。その後、日本陶磁協会に移られ、今日まで中心で運営されています。

八木 壮一 会員

すぐれた料理が作られた時代には、すぐれた器が作られました。日本陶芸史上、もっともすぐれた食器が誕生したのは桃山時代から江戸時代にかけてです。

日本に禅宗が伝わったのは鎌倉時代ですが、室町時代には幕府の庇護の下に発展し、禅宗とともに精進料理も広まります。

精進料理は、昆布や椎茸などから出汁(だし)をとり、野菜を中心に、豆腐やコンニャク、浜納豆、ひじきといった食材を使います。その調理の基本は、煮る、焼く、蒸す、揚げる、和えるなどで、味付けがしっかりしているのが特徴です。

味噌、醤油など発酵食品が発達し、日本料理の膳椀(ぜんわん)形式が定形化したのも室町時代のことです。庶民の生活にまで広がったのは江戸時代中頃です。

桃山時代にもっともすぐれた器が誕生した背景には、茶の湯の成立が大きく関係します。禅寺の本膳では漆器が使用されますが、茶の湯の懐石では折敷(おしき)、すなわち足のない30センチ四方の平膳が使われます。この折敷の手前に飯椀と汁椀を置き、その向こう側に置かれたので、向付(むこうづけ)と呼ばれました。いわゆる小鉢のようですが、この向付には魚介類をなますや昆布締めにしたものや、和えものが盛られます。

また、茶の湯の懐石の器として誕生したものに、織部焼の手鉢があります。手付鉢は盛りつけにくいだけでなく、取り扱う上でも決して実用的ではありません。しかし、豪快な手が付いていることで、料理に不思議な緊張感が生まれます。手付鉢は、日常の器としては不要なもののようですが、茶の湯という非日常の空間で使用されるために誕生した懐石の器だといえます。

料理屋で出される会席料理は、本膳五品、二の膳二品、三の膳一品というふうに分けて配膳されますが、原則として膳は引かないので、食器は最後までその場に置かれます。そのため、食べた後もそこに絵や模様のあるものが使われました。料理は舌だけでなく、目でも食くすといわれますが、食べ終わった後でも美しく見せるのが日本料理の器です。そのため四季の移ろいや慶事を表した

さまざまな文様、形態の器が誕生しました。

恐らく、世界で一番器の種類が多いのが日本料理だと思います。北大路魯山人は、「食器は料理の着物である」といいました。自ら顧問兼料理長を務める「星岡茶寮」で使用する器を制作するため、鎌倉山崎の自宅に「星岡窯」を築きました。はじめは古陶磁を自家葉籠中のものとし、魯山人の器は料理を盛ると、まさに水を得た魚のように生き生きとなります。料理も映えて、器も映える。まさに料理と器の理想的な姿を伝えています。とくに手で触る酒器や湯呑、飯碗は寸法もよく、なんともいえない魅力があります。

小皿は普通四寸(12.1cm)以下のものをいいます。中皿は七寸(21.2cm)以下のもの、七寸以上のものを大皿といいます。手で触ったり、口を付けたりする日本料理の器にとっては、器の感触とともに寸法も大切な要素といえましょう。

江戸時代の食事は、銘々膳の上に飯碗、汁椀、煮物を盛った平碗、香の物の小皿などがのっています。この銘々膳から折りたたみ式の脚の付いたちゃぶ台に変わったのは、明治20年(1887)年代以降のことですが、一般に普及しだすのは大正から昭和にかけてで、現在の洋風のテーブルに変わったのは、1960年代以降のことです。日本経済の高度成長に伴い、食生活の洋風化が進み、器も洋風のものが多くなりました。この半世紀の間に日本人の食卓は急速に変化し、いままさに混迷の時代を迎えています。日本料理はユネスコの無形文化遺産に登録されましたが、料理と器は切っても切れない関係にあります。なにがグローバルなのか、料理と器の関係についても、真剣に考える時期にきているのかも知れません。

閉会点鐘

奥山 聡副会長

今後の予定

- 4/4 「職業奉仕」西村 美智子 地区職業奉仕委員
- 4/11 休会
- 4/18 クラブ協議会「地区研修協議会の報告」

創立/1993年10月13日(平成5年)
 事務局/〒102-0073 東京都千代田区九段北1-2-2
 グランドメゾン九段906号
 Tel: 03-3288-7300 Fax: 03-3288-7400
 E-mail: ocha-rc@sirius.ocn.ne.jp
<http://tokyo-orc.jp/>

例会日 毎週水曜日 12:30~13:30
 例会場 ホテルグランドパレス Tel: 03-3264-1111
 会長 牛島 聡 幹事 青木 隆幸
 会報 山下 秀一(委員長) 山田 丈夫(副委員長)
 土居岩生 木宮雅徳 小林大介 永井一史(委員)